

2011年3月号・季刊30号

# ミンダナオの風

執筆編集\*松居友 発行：ミンダナオ子ども図書館



一つの家族に平均して  
子どもが七人から十二人  
ミンダナオの山岳地帯のマノボ族  
貧しい人々は、本場に多産だ。  
こんなに沢山子どもが居て  
自給のための土地もなく  
いったいどうやって食べこいくの？  
子どもたちは、母さんや父さんが、  
自分たちを必死に  
養ってくれているのを知っている。  
だから自分たちもお手伝い。  
水くみ、ホウキ草を地面にたたいて  
ホコリのような種を叩いてホウキを作る。  
学校に行かせてもらうわけもなく  
一四歳になると、女の子は結婚適齢期。  
口減らしたとは思いたくないのだけれど  
でも、この中から、一人だけでも  
大学を出たら、貧困から抜け出す道が  
開かれるだろう。  
でもそれは、  
夢のまた夢？  
そんな子どもたちの  
純粋で健気な  
笑顔に出会ってしまったら  
もっ後には引けない  
帰れない  
こうして新たに  
支援者探しの  
仕事を背負うお人好し



Mindano Children's Library Foundation, Inc.  
MCL

REG REG NO. CN200315083

## 国境という壁を取り去って

・・・基盤作りの終盤の試み・・・

ミンダナオ子ども図書館（MCL）は、現地法人資格を得てから、今年で八年目に入り、その意味では、基盤作りの最後の仕上げの2年が始まります。

来るこの二年間の最も重要な仕事は、支援者との家族のような密な関係を築き上げること、国境という壁を取り去って、支援の輪を世界に広げるための準備をすることだと思っています。

支援者との密な関係はMCLを支える最も重要な基盤ですが、最も後手にまわっていました。そのぶん支援者の方々には多大なご迷惑、困惑、不満、不安などをあたえてしまったと感じています。

今後は、支援者と支援者の家族、友人たちも含めてMCLの家族と考え、疑問に関する迅速な対応をしていきます。

後手に回った理由は、言い訳がましくて語りにくいのですが、「現地での活動と現地スタッフの育成が優先されてきた」という点と、「寄付を全額現地に落とすための、無駄な経費を使わない体制作りの構築」の二点が挙げられます。

最後の二年間で、この点を解決し、より国際的なMCLにしていきますので、今後ともご協力をお願いします。

## 1. 現地活動の立ち上げ、現地スタッフの育成が優先されてきた

現地での活動が、いかに大変で、便利な日本にいる人々には想像を絶するものであることを、日本から来られた頭鳥さんに語っていただきました。

頭鳥さんは、大手企業を退職された技術士で、今回は二度目の訪問。日本では趣味の農業をやりながらの悠々自適の生活ですが、将来は、ミンダナオと自宅の福岡を往復する生活を考えたいらしいです。

\*\*\*\*\*



松居 友 様

私にとって二度目のMCL訪問、滞在中は何かとお世話になりありがとうございました。予定を変更し、ピザ日程をギリギリまで使う十九日間の滞在となりましたが、そこから見えてきたものはいろいろあります。

私自身支援者の一人ですが、現地MCLの活動や子どもたちの生活の様子は、まだ良く分かっていなかった事を感じました。本当のMCLを理解していただくためにも今回の滞在中、自分の目で見えたもの体験した感想を多くの方々に、少しでも紹介してみたいと思いました。

日本の支援者の方々にも現地の活動や、子どもたちの生活の様子を知って頂くための一助になれば幸いです。

1月13日

MCLの活動は、毎朝のスタッフミーティングから始まる、スケジュールに従って行動開始である。

3名のスタッフと供にカティンド村に向かう、目的はスカラーに手紙を書いて貰うこと、支援をして下さる方々へのサンキューレターやソーリーレターである。その日の行動の効率を考え、学用品等も同時に届ける。スタッフたちの仕事の大変さは移動距離の大

きさである。

四駆でやっと登れるような荒れた山道を、二時間〜三時間喘ぐように登って行く。数枚の絵手紙を書いて貰っためにも、時間と労力を惜しまないスタッフたちに頭が下がる思いがした。

1月15日

今日はウオーターフォールへ読み聞かせだ。ウオーターフォールはアボ山への登山口でもあり、美しい滝が有るので有名な村でもあるが、急な坂道を上って行く事には変わりはない、村の人々の生活は非常に貧しい。

四十人ぐらいの子どもたちを二回に分けての移動である。朝早く第一陣が



出発、スタッフは第二陣を迎えるために又山を下る。第二陣が到着した時にはもう正午を過ぎていた。先発隊が昼の食事をつくって待っていた。流れ落ちる滝の前に、みんなで食べる昼飯の味は格別だ。

ミンダナオはスコールの多さでも有名であるが、この日のスコールは別格なものだった。四駆が動けない。止むのを待って帰路につくが大スコールの後の荒れた山道は滑りやすい。四駆の運転は、スタッフにとって緊張の連続。子どもたち全員を無事に運び終えた時は、もう夜の帳が辺りを支配していた。

1月18日

マキララのカタパガン村の保育所開



所式に参加した。松居さんは急用が出来ず来タバオへ行く事になった。学業を停止しそうな奨学生の一人の、人生相談にのるためだ。そこでプレゼンメントのアスレーが中心になってせしモニーを進めて行く。保育所の使用目的や取り決め事項等を読み上げ確認をとる。

村の主だった人達との調印を済ませ握手を交わし開所式は終了した。その後スタッフ全員で、集まった子どもたちに、歌やパフォーマンスを交えながらの、絵本の読み聞かせが始まった。村の人達も交えて昼食をすませ、喜びのうちに無事終了。

スタッフ達の仕事は多種多様だ。多くの仕事をこなして行く。

1月20日

先日ひょんな事で知り合う事になったレリнда・ランダウィさんに会うために、マグペットのイナムアランという村に向けて車を走らせた。彼女は以前日本に住んでいた事が有り日本語が話せる。松居さんとスタッフのマリベールの三人で道を探ねながら四駆で登って行った。

レリндаさんに会う事が出来いろいろな話を聞く事ができた。マノボ族の彼女は、この村のもっと上の山奥の、とても貧しい集落の出身だった。



かった。徒歩で登るしかない。松居さんはまだ足を踏み入れた事の無い村だ。上り詰めた所に数戸の集落があった。一見してこの集落の人たちの極貧の生活が窺える。中でもとりわけ自立つ家があった。九歳を頭に八人の子とも両親が、二畳程の家の中で生活している、一日一食がやっとなどという。

松居さんが呟いた、

「これを見ると、もう黙っては居れない、何とかしなければ」スタッフのマリベールの聴き取り調査が始まった。MCLの活動の原点が見えた。けれど、同時に日本の支援者の皆様の温かい心を感じ胸が熱くなった。



松居さんの表情が変わった。「是非そこに案内してくれませんか」四人でその集落をめざした。

途中四駆も登れない山道にさしか

いよいよMCLを離れる時がきた。あっという間に時間が過ぎた気がする。夕食後、子どもたちがサヨナラパーティをしてくれた。別れの言葉やグループで歌を歌ってくれた。しかしいつもと違う、声が出ていないのだ。子どもたちの胸の内が窺え目頭が熱くなった。ロロヨシ（ヨシおじいちゃん）明日帰るんだね・そうだよ明日日本に帰るよ・堰を切ったように子どもたちが抱きついてきた。もう溢れる涙を抑えることができなかった。

MCLの子どもたちは実に良く働く、当番の子どもたちだろうか、朝四時には炊事を始める。他の子どもたちも五時には起きる。学校に行く前に庭



の掃除、一階の床をヤシの実で磨く、二階のフロアーのモップがけなど苦もなくやってのける。

学校から帰ってくると、洗濯や掃除に勉強と楽しそうにやっているのだ。日本ではなかなか見られない光景である。子どもたちは底抜けに明るく笑顔を絶やさない。

ロロヨシ、サヨウナラ、次は何時来るの、子どもたちの目に妖精の涙がキラリと輝いた。  
ありがとう。

＝頭島義成＝

\*\*\*\*\*

## 2. 寄付を全額現地に落とす

MCLの活動範囲は、驚くほど広い、範囲的には、ミンダナオ全域の四分の一、しかも、最もデリケートな戦闘地帯、山岳地帯、反政府勢力の活発な地域を含んでいる。

このような場所で、地域と人々の信頼を得て、現在のような活動を可能にしていくためには、時には、死を覚悟するような場面もあった。

目の前で困窮している可愛い子どもたちを見ていると、愛おしさが胸にあ

ふれ、黙っては居られなくなる。「この子たちのために、命を捨てられるだろうか」自問自答する。子どもたちの幼気ない顔を見ると、恐怖はフッと消えていく。



現地での日本人のイメージは、大戦の時の残酷な振る舞い（マノボ族を虐殺して穴に埋めたなど・・・）もあって、良いものではなかった。寝ない子が居ると、「ハボン（日本人）が来てさらっていくぞ」というのが、口癖になるぐらいだから想像がつくだろう。

私がここに来た当時も、宝探した、奨学金を理由に子どもを集めて日本に売りさばく人身売買だ、と言ったあらぬ噂がたくさん立った。最近でこそ、無くなったが・・・

そうした人々が、大事な息子や娘を、ミンダナオ子ども図書館に喜んで預けるわけもなく、私としては、ただひた

すら誠意を尽くして避難民救済、医療、読み語りに、精力を傾けてきただけだが、その結果、今は、驚くほど広範囲の人々が、イスラム教徒も先住民も、山の人々も街の人々も、反政府組織の人々さえも、MCLの活動を理解し、信頼して下さっている。

MCLは、収容施設ではないので、ここに住んで近くの学校に通いたいかな否かは本人と家族親戚が決める。遠くても郷里の学校が良ければ、いつでも帰れる。それにもかかわらず、ここに住みたい子どもが増え、親も大事な娘や息子を信頼して預けたいと思うようになり、困窮家庭の子を優先しているものの、今MCLに住んでいる子は



100名に近い。外部や自宅から通

う子どもたちも含めると、奨学生は

500名を超えるから、五分の一がMCLに住んでいる計算になる。

スタッフは15名、そのほぼ九割は卒業生たちだ。現地の人々のお世話に加えて、保育所や下宿小屋の建設、医療、日本政府（JICA）のODAのお手伝い等々毎日走り回っている。こうした現地活動を根付かせ、立ち上げるために、この8年が費やされたと言えるだろう。

ただ、問題は、日本人々には、現地の状況や活動が想像を絶していて理解できず、そこから誤解が生ずることと、対日本に関する仕事が出来ることが、私一人だったことだ。今も現地の日本人は、私一人・・・。

その分、日本の大切な支援者の方々には、忍耐と、ご迷惑をおかけしてきたのであって、支援者無くして、活動は無いことは重々承知だから、長年に



わたって皆さんのご厚意に甘えてきたとも言えるだろう。

ただ、解決すべき課題を放ってきたわけではなく、日本から遠くにありながら、どのように支援者の方々と、密接な関係、情報のやりとりをするかは、試行錯誤の連続だった。日本事務局も二度頓挫し、三度目になってようやく発足、去年NPO法人化ができた。

日本事務局が立ち上がったのは大きな前進だが、一人一人の子どもたちの状況や活動の現実や困難さを、日本事務局が把握しているわけでもなく、さらに、事務所を賃貸し常駐の有給スタッフを置くと、膨大な経費がかかり（日本人一人を雇うことで現地スタッフ15名の給与が出せる）、せっかく多くの子どもたちを現地で救える寄付の大半を、人件費と日本事務局経費に回さなければならなくなる。

悩んだ結果。日本事務局は、支援者へのお礼の葉書を書いていただくこと、日本における法人経理の業務、可能であれば、日本における支援者探し寄付を集める手助け、を最小限の仕事として完全ボランティアとした。

その代わり支援者への対応や現地の子どもたちの状況報告、子どもが学校を停止した場合の対応やご相談、誤解や苦情の受付は、すべて現地事務局の松居

友が行うことにした。

現地の日本人スタッフの事も考えたが、日本帰国時の活動に際する、旅費交通費、宿泊費、日当は出るものの、給与は現地スタッフと同様の6000ペソ（月額12000円）。個人的に渡される講演謝礼以外は、寄付の全てはMCLに・・・現地に住む分には、生活は困らず貯金も貯まるが、日本人にはとても納得できない給与額。今のところ、この条件でも働きたいという殊勝な方は見当たらず、危険地域という事もあり、松居友一人の仕事。しかし、現地の子どもたちの状況などは、日本事務局ではわからず、私が一番良くわかるのだから、当然負うべき仕事だろう。



**お願い!**

郵送に頼り切れない現地事情を鑑みますと、8年の経験から、支援者への連絡手段は、電話とFAXによる方法が一番明確で迅速、問題の解決も速く、密に連携がとれることがわかりました。それに加えて、Eメール。

電話は、国際電話になるので、代金がかかると言われるますが、日本に事務所を置く経費と人件費を考えれば、現地対応の方が格安で、真に必要な事項や、現状をご報告できます。電話をいただいた場合は、こちらからかけ直しいたします。

**奨学生の学業停止のご報告、卒業後の支援方法や継続確認、他の子のご紹介や停止確認など、現地事情を理解していただくためにも、今後は電話かFAXでご相談したいと思えますので、再確認の意味を含めて、同封のアンケート用紙に、電話、携帯、FAX、メールアドレスなどをご記入の上、お手数ですが以下のFAXか、メール、日本事務局へ郵送でご返送お願いいたします。**

振込用紙の通信欄に、電話・FAX・携帯・メール等をお書きの上、振り込み下さってまかまいません・・・よろしくお願いたします。

電話番号：080-5502-3446  
**FAX 専用：010-63-64288-5426**  
メール：mclstaff@zar.att.ne.jp



## MCLとの出会い

大澤 すぐる

2010年5月、大学院で発展途上の貧困問題について勉強していた僕は、学部生時代の恩師である先生のゼミで後輩の指導にあたっていた。

そんな時、ミンタナオ子ども図書館というフィリピンで子供たちの就学支援や医療支援等を行っているNGOの代表である松居さんが、そのゼミで講演を開いてくださることになった。

将来は国際協力ができる場で働きたいと考えていた僕は、松居さんとの出会いに胸が躍った。



MCLのホームページをチェックし、松居さんの著書を読んで自分の研究と照らし合わせて、いくつもテクニカルな質問を考えて講演会に臨んだことを今でも覚えている。

しかし、結果的にその質問をするとはなかった。

それは、松居さんの子供たちの話をする時の幸せそうな顔や、綺麗ごとではすまないミンタナオでの戦闘の様子を見て、自分が学んできた机上の研究をどこかちっほけに感じたからである。

以前から様々な発展途上国といわれる国に足を運んで、色々な状況を見てきたつもりでいた。だが、松居さんの

講演を聞き自分のやっていることに物足りなさを感じ、講演会后、松居さんを追いかけてさに出た言葉が「MCLで勉強させてください。」というものだった。

2010年9月、僕はMCLに向かった。不安がなかったかという噂になるが、そんなものは初日から子供たちの笑顔が吹き飛ばしてくれた。

MCLに着いて最初に感じたことは、子供たちのエネルギーの凄さである。これに関してはまた回を改めて詳しく書きたいのだが、とにかく子供たちのそのエネルギーには圧倒された。

それは、塾講師のアルバイトを通してMCLのスカラー達と同世代の日本人の子供たちと接する機会が多い僕にとって、日本人の子供たちからは感じることができないものだった。

MCLの子どもたちが持つ底抜けな明るさや優しさは、夜眠りにつくときになって「そういえばあの子たちは色々な境遇にある子たちだったな。」とやっと思いだすほどに純粹なものだった。

滞在中、子どもたちに勉強を教えたつもりでしたが、僕の方が多くの事を教えてもらった気がする。

印象的だったのは、彼らの手紙や会話の中に、僕の家族を気遣う内容が多

く含まれていたことである。

たいていの日本人は（少なくとも僕は）誰かに手紙を書くときに、その人の親を気遣う文面を書いたことがないだろう。しかし、彼らは僕の家族までも気遣ってくれた。

とても心が温まる思いだった。今では僕も友人に手紙を出す際には、友人の家族を気遣う文面を加えるようにしている。

一般的に、MCLのような団体や発展途上国を想像する時、僕たち日本人は、そこに暮らす人々を「希望がない可哀そうな人々」と考える節がある。しかしそれは違うのだということを、MCLの人たちが体現してくれてい



る。MCLは支援者だけでなく、不登校になってしまった生徒や精神的に疲れてしまった人の日本からの訪問を歓迎している。これはそのような人々が訪問することで、MCLの人々のエネルギーに触れ、何かを感じ取ってほしいという、松居さんの心遣いであるように思う。近年、日本では「心の貧しさ」が社会問題となっている。そういった点から考えると、僕たち日本人とフィリピン人、どちらが豊かなかはわからない。

MCLと出会って、日本人にあってフィリピン人になれないもの、フィリピン人にとって日本人になれないものを少なからず見つけることができた。



多くの日本人は発展途上国の人々に對して何かを「してあげている」という意識がある。しかし、上述したように彼らから学ぶことも多い。したがって上からの「援助」ではなく、手と手を取り合う「協力」をしていくという意識こそが互いが発展していくために必要であると思う。

帰国する際、MCLの子供たちが「私たちは友達だよね。」と尋ねてきた。その際は、「そうだよ。」としか答えられなかったが、今この場を借りて僕も彼らに言いたい。「僕たちは既に友達ではなく家族だよ。」と。



## 若い世代を迎え入れる準備

大澤君は、今年、上智の大学院、修士課程を卒業する現代っ子だが、真剣に発展途上国の貧困問題を考えている。将来は、国連で仕事をしたいと思うのだが、こうした若者たちが日本にも着実に増えてきていると感じる。

閉塞的な日本を飛び出し、世界の、とりわけ先進国文化から「取り残されている」と言われている地域に、真実の可能性を発見し、そこから日本を見つめ直そうとしつつある若者達・・・

今まで、日本からの訪問者の受け入れを控えてきた。奨学生支援者が、支援している子どもたちに会いに来るのは大歓迎。だが、興味本位に「遊びに来るだけの訪問者は、受け入れたくないと」思ってきた。

現地の若者たちをMCLで面倒を見るときすら、責任上の不安を強く感じたのだから、日本の若者たちを招き入れるのはさらに不安だった。

私は、子どもたちを見るときに、MCLに来る前の厳しい環境、そして現在ここで幸せに満足して生活し勉強しているかを絶えず見ている。さらに、将来大学を卒業して仕事を探し、親兄弟姉妹を助け、幸せな家庭を築くため

のアドバイスをしたりもする。つまり、この子たちは、私にとっては、我が子の一人のようなものなのだ。

しかし、「遊び」に来る訪問者にとっては、「あそこに行けば、可愛い子たちが沢山いるぜ」といった程度の見方になる場合も多々あり、そうした雰囲気、MCLを腐らせると感じたこともある。

しかし、日本の若者たち、ひいては高年齢の人々の、あまりにも孤独で、生きていることの本質的な喜びが無く、自殺の多い現況を見て、また、去年から、大学で多くの若者たちに会い、話をする機会を得てから、どうしても日本の人々を放っておけない気持ちになった。日本だけではない、国境の壁を取り払って、世界に心を向けながら、支援者と共に、大きなMCLファミリーを作り上げて行くことこそが、これからの課題ではないかと思っている。



# Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない  
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも  
はるかに美しいと感じるときだってある。  
けれども、どうにもならないのが、  
お金が無くて学校に行けないときと  
病気になっても病院に行けないとき・・・



## ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付**  
専用の振り込み用紙を日本事務局にご請求いただくか、直接下記の振替口座をお願いいたします。寄付をいただいた方々には、年四回季刊誌「ミンダナオの風」をお送りしています。
- 2、大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**  
振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回の季刊誌と手紙、7月プロフィール、3月スナップ写真、5月成績表などが届きます。文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里親支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）**  
振り込み用紙の通信欄に「里親」と書いて、一部振り込んでいただければ、年四回季刊誌と3月に絵手紙、7月プロフィール、3月スナップ写真が届きます。文通やプレゼントも可能ですが、返事は半年ほど後になる可能性があります。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 4、保育所建設支援・・・30万円（一括振込みでお願いします）**  
振り込み用紙の通信欄に「保育所建設」と書いて振り込んでいただければ、年四回季刊誌と10月には毎年現地の保育所のスナップ写真。開所式参加や訪問も可能です。
- 5、古着等の物資支援：郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。**  
詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

**郵便振替口座番号 00100 0 18057**  
**加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』**

スカラシップ・里親に関する質問、スカラシップ支援の希望・継続・停止など  
または現地訪問その他に関する問合せは、  
電話・FAXかメールでご連絡いただければ幸いです。  
折り返し、こちらからご返事をさせていただきます。

**電話番号：080-5502-3446**  
**FAX 専用：010-63-64288-5426**  
**メール：mclstaff@zar.att.ne.jp**

MCLジャパン（日本事務局）：〒803-0816 福岡県北九州市小倉北区金田2-8-30-1201  
Tel・Fax 093-581-1150

現地住所：Mindanao Children's Library : Brgy. Manongol Kidapawan City Cotabato 9400 Philippines